

研究協議会記録

1 研究の視点

よりよいFORMの追求を目指して、協働的な学びの場や生徒同士による相互評価の時間を設定したことは、主体的に運動に取り組む生徒を育成するための有効な手立てであったか。

2 自評

- エージェンシーを発揮するために、AARサイクルを学習に取り入れている。現状をよりよくするために理想とする自分の姿を想像し、見通しを持ち、実際に行動し、振り返り、どこまでその姿に近づけたかを繰り返す学習形態とした。
- 本時は、生徒が主体的に活動できるような場面の設定を行った。練習については、生徒が考えたものと教師が考えたものを組み合わせて取り組ませた。良かった点としては、協働的な学びの場において、習得した知識を活用し、言葉で表現できていたことや、課題に沿った具体的な学習活動になっていたことが挙げられる。一方で、課題としては、活動の間で、つまずきの事例を取り上げて考えさせたが、話合いの後に改善があまり見られなかったことが挙げられる。効果的なアドバイスが（教師からも生徒からも）できればよかった。

3 質疑応答

- ハードル走の授業において、グループによる課題解決にした意図は何か。
→生徒が仲間との関わり合いの中で、自己の姿を客観的にとらえて的確に自己を評価する力を高めたり、目標への達成状況を確認し、次の行動や意思決定につなげたりすることができたら良いと思い、設定した。
- 普段の授業でワークシートの記入について指導をしているか？
→自己評価と相互評価を取り入れている。自己評価では、自分の設定したゴールへの達成状況やゴールを達成するための練習方法について書かせている。そうすることで、生徒は学びを自覚しながら学習を進めることができた。相互評価では、仲間の課題や出来映えについて「生徒たちが作成した評価基準」に沿ってアドバイスさせた。この自己評価と相互評価を通して、自己の現状を把握したり、自分のゴールを見直したりさせている。

4 意見

- ハードル走で大事なことは、「短距離走」と「ハードル走」のタイムの差を縮めることだと思っている。
そのためには、障害に対して合理的に越していくことが大切。今回の授業では、脚が流れている（足がレになっている）子が多かった。スピードが上がるとブレーキがかかりやすくなるので、ブレーキのかからない動き（脚で7のマークをつくるなど）を先に身に付けることが大切ではないかと感じた。
- ハードル走における技能の習得には、速く走る→ブレーキを掛けない→着地の指導が大切であり、低いハードルやエアでハードルを越えるなど、条件設定を工夫するとよい。
- 自己評価の在り方について、時間短縮のために音声で入力しても良いのではないかと思う。口に出して伝えることが大切で、「いかに対話的に学習できるか」や「いかに動きを言葉にして伝えることができるか」を生徒に意識させるとよい。
- チェックリストが文章だったので、キーワードや教師の簡潔な言葉にすると、授業の中でもその言葉が生徒の口から出てくると思う。